

野ネズミ調査会の記録と今後の発展性

渡辺展之

これまで通信でも何度か野ネズミの話題を取り上げてきました行なっています。この5年間、博物館の自然講座などの機会をいただいて、道内各地で野ネズミを題材とした調査会を行なっています。今回その記録を振り返りながら、環境教育としての有効性と改善点や発展性についても述べていきたいと思ひます。

野ネズミを見る機会と観察しやすさ

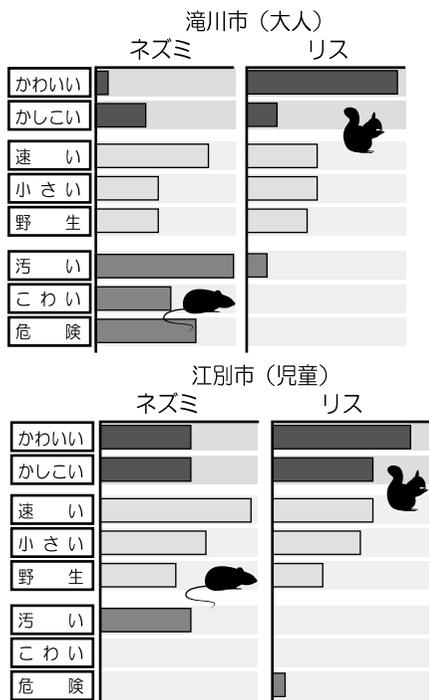
ネズミはミッキーマウスやガンバ(古いか?)などのアニメではキャラクターとしてしばしば用いられているなど、親しみのある動物のように思えます。一方で病気を媒介する「不潔」というイメージや畑や庭を荒らす「害獣」としてのイメージも持たれています。ネズミの印象を観察会の参加者にたずねると、子どもでは「かわいい」「かしこい」などの肯定的なイメージが、大人では「汚い」「危険」などの否定的なイメージが多くなります(図1)。リスに関してはイメージに差がないのにネズミに関して差があるのは、子どもは家ネズミを見るのがなく、本やテレビなどからの情報によって知識・印象を得ているのに対し、大人は家で見えた実体験が影響していると思ひます。

家ネズミの印象は、良くも悪くも生活の中で得られるものですが、野ネズミはというと、実物を見る機会が野生動物の中でも決して高い方ではないでしょう。参加者にアンケートをとってみても、見たことがあるという人は少ないです。年配の方には見たことがある人も多いですが、話を聞くとやはり家ネズミをさすことがほとんどのようです。せいぜい野外で樹皮を食べた跡や

糞、坑道などの痕跡を見かけるくらいではないでしょうか。エゾリスやキタキツネなど他の哺乳類に比べて見かけないのは小さく・夜行性であるためです。しかし野ネズミは個体数が多く、生け捕りが比較的容易で、かつ小さいため扱いが難しくなく、野ネズミは野生の哺乳類のなかで最も観察しやすい動物です。

野ネズミと同じようなタイプの哺乳類にコウモリがいます。ただ、コウモリも夜行性で個体数が哺乳類のなかで多いグループであるという共通点をもつ一方、片や空中を活動場所とし、片や地上を生活場所としているという対照的な面も持っています。北海道の自然史系の博物館では、コウモリの調査が盛んで、観察会も毎年のように行なわれています。道新基金の北海道ネーチャーマガジン・モーリー第4号でも特集が組まれるほどで、博物館を中心とした道内各地で多数の方が関わっています。野ネズミの調査に比べると捕獲許可をとる手間や調査を夜にやらなければならない制約などがあり大変なはずですが、ここまで北海道で盛んになっているのは、道内各地の博物館で市民と一緒に調査を行ってきた前田喜四雄さん(コウモリの専門家)の存在

図 1 . ネズミとリスのイメージ調査



が大きいのだと思います。

それに比べると、野ネズミは観察しやすいにもかかわらず、博物館の観察会や講座を見ても野ネズミを対象としたものは少ないようです。調査自体難しいものではなく、多少の手間を惜しまなければ、大きな楽しみ・発見も同じように得られると思うのですが…。そこでまずは、これまでの調査会の開催状況を整理して見て、その有効性について考えてみます。

■これまでの調査会の開催状況について

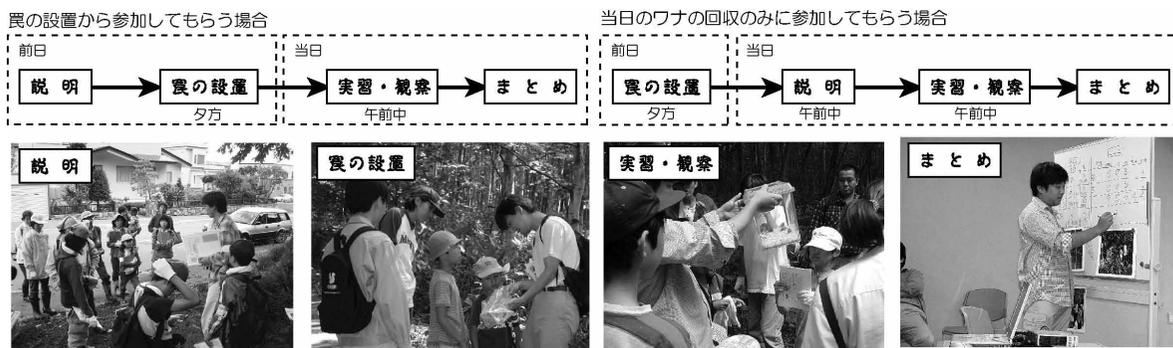
開催させていただいたのは、この5年間に8回。表1にあるように、主催は滝川自然史美術館(1998年9月)・美幌博物館(2000年10月)・ふれあい交流館(2001年7月)・ひがし大雪博物館(2002年7月)・西野フォレストクラブ(2003年8月)・釧路ト

表 1. 調査会の開催状況

場所／主催者	対象	実施日	環境	参加者	ワナ設置	エサ設置	撮影装置
滝川市 ／滝川美術自然史館	一般	1998年 9月	地方都市 郊外の林	約10 名	●	●	
札幌・熊の沢公園 ／さっぽろ自然調査館	一般	1998年 9月	都市の残 存林	約5 名	●	●	
美幌町 ／美幌博物館	一般	2000年 10月	地方都市 の残存林	約25 名	●	●	
江別市 ／野幌自然ふれあい交 流館(北海道)	子ども	2001年 7月	野幌森林 公園内の 林	約25 名	●	●	
倶知安町 ／百年の森ファンクラブ	一般	2001年 10月	地方都市 の残存林	約10 名	●	●	
上士幌町 ／ひがし大雪博物館	一般	2002年 7月	山村の森 林	約30 名	●	●	●
札幌市 ／西野フォレストーク ラブ	子ども	2003年 8月	都市近郊 の林	約20 名	●	●	●
釧路町 ／トラストサルン釧路	一般	2002年 9月	山村の森 林	約10 名	●	●	

ラストサルン(2003年9月)と調査館の主催で行なった調査会(1998年9月)です。博物館などの公式行事が4回、市民団体による行事が3回、調査館による行事が1回です。参加者は5~30人以上とまちまちです。対象は、小・中学生向けが2回、一般向けが6回です。時期は7月から10月の夏から秋にかけて行なっていますが、本来最も適している時期は、ドングリの落ちる9月ごろです。この時期は子ども大きくなって数が増え、野ネズミがドングリの運搬に忙しく動き回るので捕まえやすいのです。この時期からあまり遅くなると気温も低くなり野ネズミの活動が低下してしまいます。また、夏季はネズミの数は少ないのですが、気温が高く活発に活動している分、比較的捕まえやすいです。天候は晴れていたほうがよかつかまり、雨が降るとあまりつかまりません。これまで、くもりのことはありましたが、開催当日に雨が降ったことはなく、これも調査館の日頃の行ないによるものでしょう(笑)。

図2. 調査会の流れ



■ 調査地の条件

一般参加で行なう調査会では、たいていは博物館から歩いていける場所、もしくは車で10分程度で移動できる範囲に限定されます。確実に野ネズミを観察できるのは人里から離れた林ですが、調査会では時間の都合もあり難しく、実際には近郊の林でワナをしかけることが多くなります。以前、札幌東部の孤立した林で調べた際には、野ネズミの生息は面積が5ha程度以上の林が必要なことがわかりましたが、ここまで小さい規模の林でなくても、同じような孤立環境にある林で行なうことが多く、実際、8回中3回は孤立林での調査です。このため、必ず捕獲できそうと思える場所で行なうことはあまりありません。いないかもしれないという心配があって、開催する側としては結構ハラハラします。また、林床は下草で覆われているほうがよいのですが、ササが密生しているだけのところよりは、ササに混じって複数の草本類が混ざっているほうが好まれるようです。

■ 調査会の流れ

調査会の模様についてはこれまでも、何回か通信でふれているので(20号の野幌参照)、ここでは簡単に観察会の目的と流れを紹介します。目的は、野ネズミの生息状

況と環境との関係を知ってもらうことです。観察を通して野ネズミに対する正しい知識を持ってもらい偏見をなくしてもらうこと、調査を通して環境が異なると暮らす野ネズミも違うことや森林の質も生息に大きく影響していることを実感してもらうことです。説明だけよりも実際に調査から得られた結果を見れば説得力は増し、その後に関連する知識を吸収しやすくなると思います。

調査会の過程は、説明・ワナの設置・実習[確認]・まとめに分かれます。説明→ワナの設置→実習[観察]→まとめの場合と、ワナの設置→説明→実習[観察]→まとめ場合があります(図2)。前者では、野ネズミに関する解説と調査の目的・内容についての説明を、室内でプロジェクターを使ったり、野外でパネルを使って行ない、その後に関係者に実際にワナを仕掛けます。後者では、日程上参加者がワナをしかけられないために、こちらのスタッフのみでワナの仕掛けをしています。仕掛けるワナの数は40~60個程度です。発達した林・二次林・草地というように環境ごとに20個程度づつ分けて設置します。野ネズミの捕獲状況を環境でも比較しやすくなるためです。後述しますが、エサの設置や自動撮影装置の設置も同時に行ないます。また、野ネズミがエサとしていたり、死体を食べられたり

表 2 . 調査会の捕獲成績

場所／主催者	当日の 天候	ワナを設置した環境	罟の 数	設置 日数	機会 数*1	捕獲数		
						全 体	ヤチ *2	アカ /ヒ メ*3
滝川市／滝川美術自然史館	晴れ	草地・ニセアカシア林・広葉 樹林	40	1	40	3	1	2
札幌・熊の沢公園／さっぽろ自然調査館	晴れ	広葉樹林	60	1	60	2	0	2
美幌町／美幌博物館	晴れ	広葉樹林	40	1	40	0	0	0
江別市／野幌自然ふれあい交流館(北海道)	晴れ	人工林・シラカバ林 ・草地・針広混交林	40	1	40	3	0	3
倶知安町／百年の森ファンクラブ	晴れ	広葉樹林・草地・湿性林	60	1	60	3	0	3
上士幌町／ひがし大雪博物館	くもり	針葉樹林・広葉樹林・河畔林	60	1	60	7	0	7
札幌市／西野フォレストーズクラブ	くもり	広葉樹林	25	1	25	1	0	1
釧路町／トラストサルン釧路	くもり	広葉樹林・ササ草地	70	2	140	16	11	5

*1 ワナの設置数×設置日数 *2 ヤチ…エゾヤチネズミ *3 アカ…アカネズミ、ヒメ…ヒメネズミ

する地表性の昆虫たちを捕まえるためのトラップ設置も同時に行なう場合もあります。

翌日の実習時に参加者にワナを見てまわって確認してもらいます。見てまわる前に、参加者にワナをしかけた環境でそれぞれ何匹捕まるかを予想してもらいます。捕獲できた場合はワナから一時飼育かごに移して、種の形態の特徴や雌雄の見分け方などについて観察します。最後に調査結果のまとめを行ない、観察したネズミを森に帰したところで終わりです。

■ 調査会での捕獲結果

捕獲の条件が比較してよかったときは、毎回3～7頭前後が捕獲できています(表2)。捕獲率でいうと10%前後と決して高くないのですが、これは最初に述べたように異なる環境タイプに設置しているため、生息している可能性が低い場所にも設置しているせいもあります。参加者にしてもらった捕獲数の予想は、比較的近い数字であったことが多いです。捕獲数が少ないので当てやすかったこともあります。そもそも生息していてもそんなに捕まらないものだ

と読んだ人も多かったのでしょうか。捕獲される種は、アカネズミ、ヒメネズミとエゾヤチネズミですが、林の中心部にかける割合が高いので、アカネズミ・ヒメネズミがほとんどです。草原性のエゾヤチネズミと森林性のアカネズミ・ヒメネズミと一緒に観察できると、形態や生態の違いを比べるのにわかりやすく説明できますが、これが実現できたのは2回だけ(滝川・釧路)でした。野幌ではあらかじめ事前に捕獲しておくやり方で両方を観察することができましたが、1日だけの捕獲ではなかなか同時にというのは難しいです。

調査地では環境タイプを分けて、「発達した林」・「二次林」・「人工林」・「草地」のように異なる場所にワナを設置しています。二次林や人工林のようにいる可能性の低い林はともかく、特に発達した林ではできるだけ捕獲できそうな場所に設置します。すでに述べたように条件の制約があるので、ワンチャンスを逃さないように確実にモノにする必要があります。

野ネズミが観察できることをウリにしていますから、捕獲できない場合は場が

チョット盛りさがってしまいます。このときは博物館の学芸員の方に用意していただいた剥製を使いながらのまとめになってしまいました。トホホ…。捕獲できないときは調査会の意義や楽しさも半減してしまうので、捕獲の可能性を高くするように場所と時期の選定は慎重に行なうべきでしょう。全く捕獲できなかったことは日程の調整がつかず、調査会が10月下旬に実施されたことや調査地を街に近い畑地に囲まれた孤立林で行なったことが影響したようです。

■ 参加者の反応

野ネズミを見て、恐がったり・いやがりした参加者はいなかったと記憶しています。初めてみる方が多いので、興味を持って観察していたようです。その一方、野ネズミそのものに興味が集中してしまい、こちらが意図した他のテーマについての関心は、散漫になりがちでした。必ずしも予想したものと同じ結果が得られるわけではないので、結果をうまく説明しにくくなることも原因になっています。

観察中に野ネズミにさわるときには手袋などをしてもらっていますが、こちらが触っていいと言わなかったこともあると思いますが、積極的にさわろうとする参加者はあまり多くありません。噛まれると思った人や、触ってみるのは抵抗もあるし、ネズミにも悪いと思われる方が多かったのかもかもしれません（実際に長く掴んでいると逃げようと手を噛んできます）。

■ 調査会での捕獲による観察の問題点 —ネズミにストレスを与えるという問題—

生け捕りワナによる捕獲は観察にとって有効な方法です。繰り返しになりますが、生きている姿を観察できることはそうなく、初めて目にする人なら、記憶に残る経験になるはずですが。一方で方法の問題点や限界もあります。まずは捕獲によって野ネズミに与えるストレスです。生け捕りするはずがワナの中で死んでしまうことがあります。気温が低かったり、夜から朝にかけて雨が降った場合に多いのですが、特に翌日のワナの確認作業が遅くなると、その分体力が弱って死んでしまう確率も高くなります。本当は、早朝に確認するのがよいのですが、ワナの確認を参加者にしてもらうことを考えると、開始時間や事前の説明の関係上、どうしても午前中の遅い時間になってしまいます。早朝に調査会ができればよいのですが…。また、生け捕りできたとしても急激な環境の変化に野ネズミにどうしてもストレスを与えてしまいます。捕獲したとき、たいていのネズミはちょっとおびえてしまうか、活発に暴れたりしてストレスを感じています。たまにこのストレス下に置かれても与えたエサを平然と食べるネズミもいるのですが。

また、捕獲した個体を観察するので、その野外での生き様を観察できるわけではないという手法の限界があります（例えば、この方法でネズミがドングリやクルミを運ぶ姿を見られるわけではありません）。ネズミの体の特徴から、どのように運ぶかを口頭やイラストで説明することは簡単ですが、説明だけでは納得するよりも、行動を観察できるに越したことはないでしょう。

★その他の観察方法

捕獲による観察を補足するうえで、ウチ

では他の観察方法も併用して行なっています。

●エサ台の設置〔間接的な観察〕

ウチの調査会では、生け捕りによる観察と併用して、エサの設置をして持ち去りの程度を観察しています。捕獲できなかったときの「保険」の意味もあります、直接観察できるものではないですが、エサの持ち去りの有無で野ネズミの存在を確認できます。また、エサを数種類用意し、持ち去り程度の差を比べることで野ネズミの嗜好性を調べられます。ドングリ・クリなどの野生の堅果や小豆・落花生・ピスタチオ・クルミ・さつまいなどの既製品の穀物類、コクワなどの野外ですぐ調達できる液果などを設置しています。多くの場合、全く持ち去られないか重いもの(さつまいもなど)を除いて全て持ち去られているかのいずれかという両極端な結果が多いです。以前、クリとドングリ(ミズナラ)の嗜好性に違いがあるか実験してみたことがありますが、このときは30個ずつ置いた実を全て持ち去られてしまったので、嗜好性の違いはわかりませんでした。本州では、コナラとコジイの実を一緒におくと、アカネズミはコジイはその場で食べ、コナラは持ち去るという報告があります。小さい堅果はその場で食べ、大きな堅果は持ち去ることが効率がいいためと考えられますが、このように堅果に対する嗜好性は注意深く調べれば、いろいろわかってくるかもしれません。

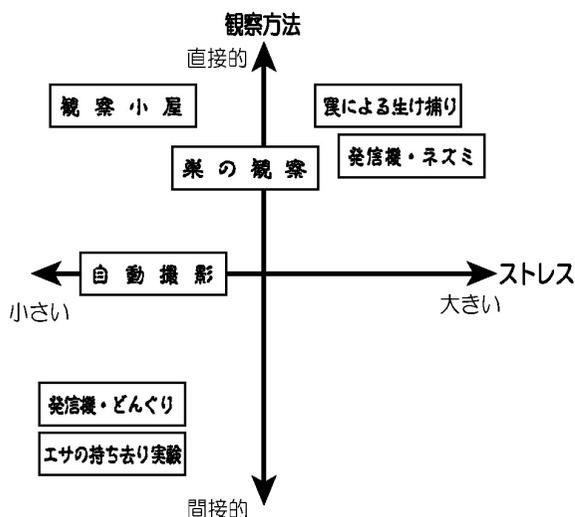
●デジカメ自動撮影装置

先ほどのドングリとクリの嗜好性の調べた実験例も、逐一持ち去る様子が確認できれば、どちらを先に運んでいるかで嗜好性がわかります。自動撮影装置を用いると設置したエサを持ち去られる様子を撮影でき



ます。ウチの装置はデジカメに赤外線センサーをつなげたものですが、これを使えば、野ネズミが「何時何分に食べにきたか」・「どのくらいの時間間隔でやってくるのか」・「(複数のエサを置いていた場合)どのエサから持っていくあるいは食べるのか」などの行動を知ることが可能です。個体の特徴もおさえれば個体識別も可能です。こう書いておいて、実際の実績はどうかというと、あまり順調にはいっていません(笑)。センサーの調子はよくなく、厳密にエサをとりよきたネズミをすべて撮影してはいないようで、センサーの感度のいいときだけ写している状態です。しかも、この装置が実践でちゃんと動いてくれたことはまだ1回だけ(東大雪)と安定感もいまいちです…。それでも、エサを持ち去るネズミの様子や何時間ぐらいでエサがなくなるかといったことを知ることはできています。こうして写真が撮れた場合には、まとめの時間にスクリーンに写して紹介していくと、参加者はより野ネズミの行動を納得してもらえます。電源のバッテリーは少々重いですが、他の装置は軽量なので、持ち運びにも比較的便利です。ただ、この装置はデジカメを合わせた特注なので、少々値段ははってしまいます。

図3. 野ネズミの観察方法とストレスの関係



■ 観察方法の今後の工夫について

観察方法は、野ネズミにできるだけストレスを与えずに多くの情報が得られるものが望まれます。調査館ではまだやっていないですが、こうした条件に合う実現できそうな観察方法として、次のようなものがあります。また、これらの観察方法を野ネズミへのストレスとの関係で図示すると、図2のようになります。

● 小型発信機による追跡

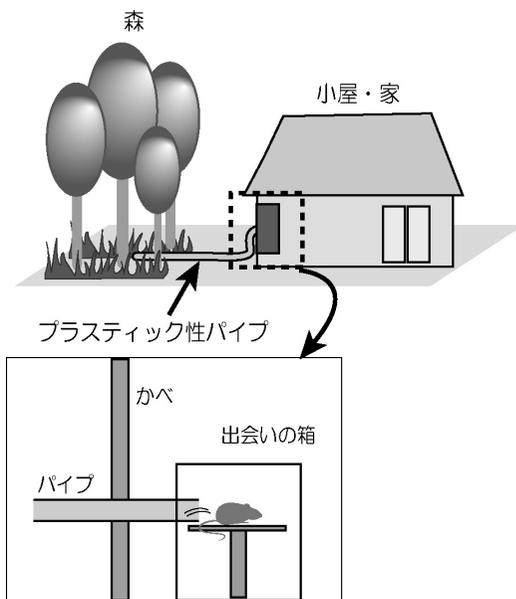
直接観察する方法ではないですが、エサを持ち去った後のことを知りたいときには有効です。野ネズミの体につける場合と、どんぐりにつける場合があります。野ネズミにつければ、行動圏や巣の位置を知ることができ、どんぐりにつけば、「野ネズミにどのくらいの距離を運ばれるのか」や「どんな場所に貯食されているのか」などを知ることができます。どんぐりの場合は細い糸をとりつけて追跡する方法もありますが、噛み切られてしまい追跡できないことも多いようです。もっとも発信機の場合は壊れたり、見失ったりすることもあるので、

その場合は高価な道具のため大損してしまいますが。

● 観察小屋

捕獲する方法は、野ネズミに大きなストレスを与えてしまうことを述べましたが、この方法は与えるストレスはほとんどありません。今泉吉晴さんは『野ネズミの森』の中で、こうした観察装置を紹介しています。林の中にある小屋に野外から通路となるパイプを引き入れて、野ネズミを小屋のなかの食事場を作った水槽やアクリルの箱へと導く仕掛けをつくっています(図4)。『出会いの箱』と名づけられたこの装置は、ネズミが次第に慣れ人の気配や明かりにも気にせず出入りするようになるそうです。これなら、野ネズミにストレスを与えず、木の実の食べ方を落ち着いて観察することができます。これを応用して、野外でもこうしたパイプ通路と食事場となる空間を用意してあげれば、固定観察場所にはできのではと考えています(ただ、仕掛け作りに

図4. 観察小屋の模式図



は長期間固定しておいてもいい場所が必要なので、その実践場所を探している最中)。

調査会の参加者のなかには、自宅の裏に林があって、春先にはアカネズミがよく家のベランダまで出てくるのを見かけるといった方もいらっしゃいました。こんな自宅を持っている方はお家で観察することもできそうです。いずれにしても、この方法は、一度試してみる価値があると思います。

ただし、あらかじめ装置をつくり、ネズミの警戒心がとけるまで時間がかかるので、かなりの前準備が必要です。

● 巣の観察

究極の観察は巣の中の様子を見ることでしょう。最近、猛禽類の巣の観察に、フィールドスコープとパソコンをつないで、巣の映像をパソコンのモニターに大きく映し出して観察する方法が利用されています。これは、大勢で観察できることと人が巣に接近してストレスを与えないことを両立させています。猛禽類の場合には木の上に巣を作るので、こうした方法が有効です。しかし、ネズミの場合、ヒメネズミは樹洞に巣をつくり、アカネズミは地下に巣をつくりますが、いずれも「密室」です。そのため、この手法は使えません。しかし、鳥の巣箱をかけると、巣として利用してくれることがあります。木に掛ければヒメネズミが利用し、巣箱を地上に設置しておけば、アカネズミが利用するかもしれません。こうした人工巣をネズミが使ってくれば、観察への道もひらけます。在宅中のところをお邪魔することはできませんが、不在のときには貯食している物などを調べられそうです。

どうしても、巣の中の様子を見たい場合には、CCDカメラを用いるのがよいでしょう。撮影装置と同じく行動を撮影するもの

ですが、こちらは映像として見ることでできるので、より多くの情報が得られそうです。ただ、映像も赤外線センサーを利用したものなので見にくくなってしまいが難点でしょうか。また、観察小屋と同じように、これを調査観察等に利用する場合には、前もっての仕込みが必要なので手間もかかるでしょう。なんととっても、巣箱を設置しても利用する確率はかなり低いようなので、確実性はかなり劣ります。

■ 調査会の発展性

調査会の内容をふりかえり、今後どのような改善点と発展性が期待できるかを考えてみました。前述したように観察方法の工夫はその一つですが、ここでは調査の内容についての話です。これまでの調査内容は、野ネズミの生息と環境を知ってもらうような初歩的なものでしたので、もう少し突っ込んだ内容のものもあっていいと考えます。それには、ある程度継続したプログラムであることが望ましいと考えます。これまでの調査会は単発的に行なわれることがほとんどであり、続けて行なわれることはほとんどありません。継続して調査会が行なっていると、奥行きのある内容で行なえます。

★ 継続的な調査

調査会での捕獲調査は、観察のため・どんな環境に暮らしているかを知るために行なっていますが、一般の調査では生息する個体数の推定にもよく使われます。「再捕獲法」という方法で、捕獲した個体に標識して再放逐し、数日間程度調査を続ける間に、

再捕獲される割合から個体数の密度を推定する方法です。毎年継続して行なうことで個体数の変動を知ることができます。

一般に野ネズミの個体数は年によって周期性をもって大きく変動してすることが知られています。この変動のメカニズムについては諸説あって議論に決着はついていません。斎藤隆さんの『森のねずみの生態学』は、エゾヤチネズミの個体数変動のメカニズムの謎の解明に取り組んだ自身の研究について、調査体験談を交えながら記した本です。この中で北海道各地の営林署で行なっていた個体数のデータについての記述が出てきます。林業では、ヤチネズミは樹皮（特に造林地）を食べる“害獣”として扱われてきたため、その生態を把握することが防獣の対策を立てるために重要なことと考えられてきました。このため、エゾヤチネズミを対象にした個体数調査は、昔から毎年定期的に行なわれてきて1950年代から40年以上もの個体数データが蓄積されています。（その年に散布する殺鼠剤の量もこうした個体数データによって決められるそうです）。こうした継続調査は行政が仕事として行なわれていたからこそ、長期間にわたって行なわれてきたという面がありますが、殺鼠剤の量を定める以外に使われなかったこのデータが個体数の変動を説く一つの重要なデータとなっています（詳しくはこの本をご覧ください）。これは、1年1年の単純な調査の積み重ねが重要な事実を教えてくれるという良い例です。この発見は、そのデータを解き明かす能力によるどころも大きいので、こんな発見がいつもできるわけではないですが、調べることを継続していくことで皆が共通認識できる野ネズミのデータが蓄積できることになります。次回に調査を行なうときに、前年の結果を

ふまえて予想したり、「どうして変動しているのか」や「何によって変動がもたらされているのか」など関心も次第に広がってくるでしょう。こうした調査を続けていくときに、最初の数回は調査の指導も必要だと思いますが、その後は専門家のアドバイスを受けながら、参加者たちだけで行なっていくことも可能です。

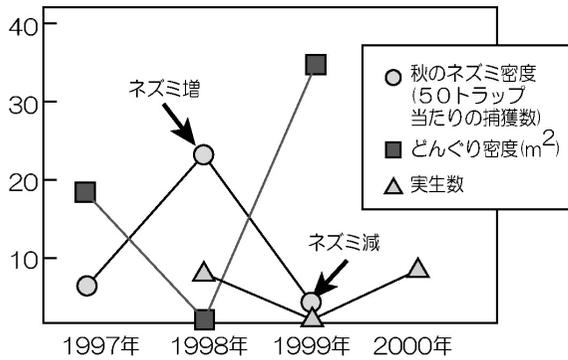
★個体数の変化の要因を探る—ドングリの生産量との関係—

野ネズミの個体数を調べるだけでも十分意義がありますが、個体数の変動と関係していそうな要因も一緒に調べると調査も面白くなります。例えば、アカネズミは冬季の食糧をドングリなどの堅果に依存していることはよく知られていますが、以前、野幌の野ネズミの個体数とミズナラ生産量の関係について3年間ですが調べたことがありました（その後都合がつかずに行なっていませんが…）。このときの結果を見ると、ドングリの多かった翌年に野ネズミの個体数が多くなり、ドングリの少なかった翌年には、野ネズミの個体数が少なくなる傾向が見られました。わずか3年の結果でしたが、他の地域でもブナの豊作とネズミの個体数が連想しているという現象が報告されており、さらに長い期間行なうと堅果の生産量との関係も、もっとはっきりわかってきそうです。

こうした調査は難しくなく、すぐに覚えられますし、1回の作業量もそれほど多いものではありません。野ネズミの個体数は生け捕りワナを使って調べればいいし、ドングリの数を数えるのも種子トラップ注1を落ち始める前に置いておけば、落ち終わった跡に来て数えるだけです。もしドングリ

との関係が明瞭であれば、ブナの豊凶予測注2のようにドングリの豊凶の予測ができれば、ネズミの個体数も予想できそうです。今年は個体数が少ないから調査会では観察しにくいかなといった予報も可能になるわけです。

図5. ネズミとドングリとミズナラ実生の数の変動



注1

種子トラップの作り方は図6を参照。

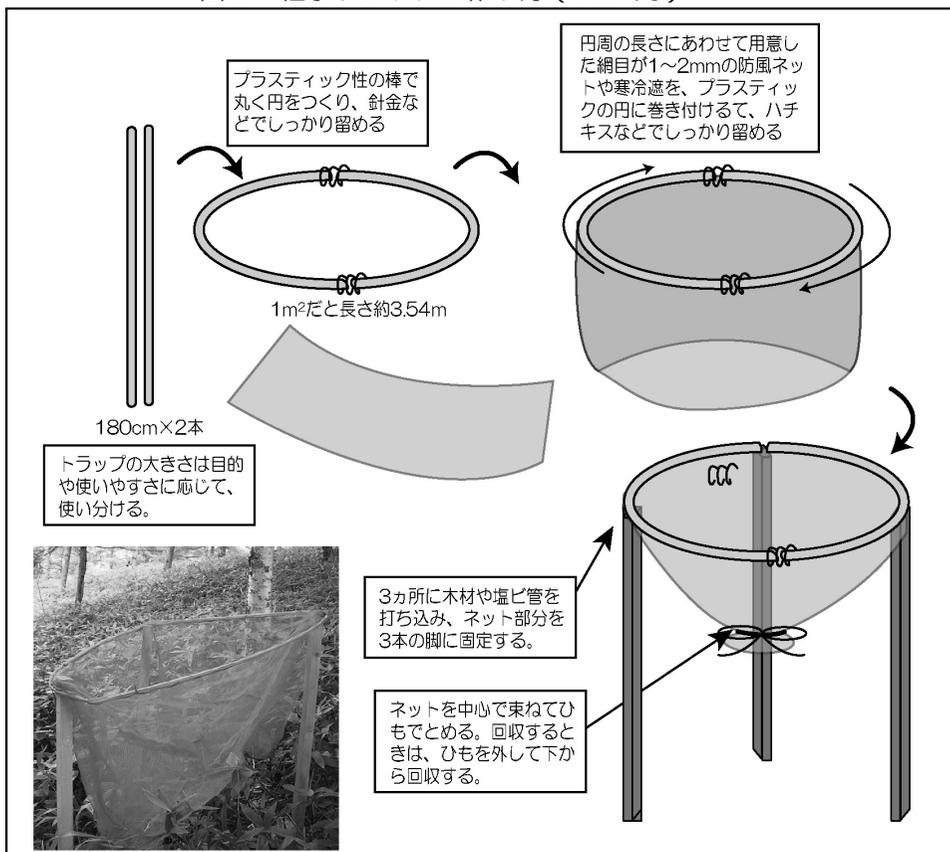
注2

北海道林業試験場の道南支場では、1996年からブナの豊凶の予報を出しています。これは、前年の開花量と気温から実の量を予測する方法を考え出したもので、苗を育てる際の堅果の採集スケジュールなどに利用されています。詳しくはホームページを <http://www.hfri.bibai.hokkaido.jp/11donan/donan.htm>

★各地域で同一の調査を

一つの地域だけで調べることも十分に意味のあることですが、同じ調査を複数の地域で行なうと、比較ができて調査からわ

図6. 種子トラップの作り方 (1m²用)



かってくることも飛躍的に増します。例えば、さきほど紹介した斎藤さんの本のなかにある個体数データの継続期間の長さもすごいのですが、なんとこの調査は道内各地400点以上もの場所で行なわれています。400地点もの場所で調査を行なったことで、地域によって個体数の変動のしかたが異なったりいくつかの地理的にいくつかパターンがあることがわかっています。(これが個体数の変動の謎をとくカギにもなるのですが、これも詳しくはこの本を)。これはエゾヤチネズミについての話ですが、アカネズミについてこうした調査は知られていません。複数の地域で共通した調査を行なえば、エゾヤチネズミと同じような地域による違いが明らかになってくるかもしれません。エゾヤチネズミと比べて、地域間で個体数の変動は同じように変化しているのか全くバラバラに変化しているのか、そのしくみを知るきっかけになるのではと思います。

■おまけ・鳥獣保護法改正

2003年4月から新しく改正された鳥獣保護法が施行されました。これまで、「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」と明治の文体で書かれた条文が、現代語でわかりやすくなりました。昔の法律は以前、資料として読もうかと思ったときに読む気を失ったことを思い出します(明治のカタカナ文体の条文が今まで使われていたことがすごい)。文体以外の改正では、これまで獣類では捕獲許可の届け出の必要なかったネズミやモグラ類(やはり害獣として見られていた?)にも適用されることになりました。ネズミを捕殺する際には許可が必要になるわけです。ただし、農林業に伴ってやむを得ず捕獲し

てしまう鳥獣についてはネズミ・モグラ類に限り捕獲許可が免除されます。林業で行なわれている殺鼠剤による捕殺もこれまでどおり合法です。一方で、調査会をするときには、事前に捕獲許可をもらわなければならないので、計画的な実施が必要になりそうです。

■最後に

ネズミに関する調査会は、多くの実践を経験していくことが、技術を磨き内容的にも高めていくことの早道です。というわけで、今後も開催についてご相談をお受けしますので、お気軽にお問い合わせください。また、こんな観察方法・調査方法・観察装置もあるというご意見・情報もいただけるとうれしいです。

引用している図書

- 今泉吉晴 森の新聞①『野ネズミの森』 フレーベル館 1500円
斎藤隆 『森のねずみの生態学』 京都大学学術出版会 2300円